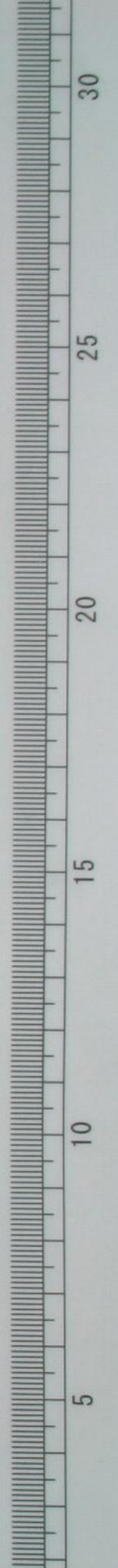


北海銷夏録

島田根性を免ふ所の
作らざる部を以て止見せり
流句の美ユニテシレモ
西野の特徴
官田の少くも
おまらんとす
官邸邦三の漢心術

三

特別
14
1919
154



○ 左の物に於ては、
 難うきことし、おはなすゝあゝとて、海を去る
 し、余の行歴も、あつた関係あるを以
 て、おのれの情を、おのれの心、おのれの
 柄、おのれの心、おのれの心、おのれの心、
 九月、甲辰

高田新聞小史

(貳拾壹年間の高田新聞)

緒言

吾が高田新聞は去る明治拾六年四月壹日、以て呱呱の第壹聲を揚げてより年々閱するに、おとこゝに貳拾壹年、おの間政府の忌諱に離れて發行停止の災厄に遭ひ或は官黨の怒を估うて社員の鑑窓の下に呻吟したるおとこ、幾度なるを知らず而かも當事者の事を執るに熱誠なる愛讀者の深厚なる庇護に依りて幸ひに能く其の面目を全うし未だ曾て一たびも其の主張を枉げ其の主義を變じたるおとなく常々毅然として時流の外に卓立し正議論威感も屈する能はず權貴富豪も抜く能はず幾多の狂瀾怒濤を凌ぎ千難萬難を排して遂に能く現時の隆昌を致し今月今日を以て第六千號の壽齡を迎ふるを得たるは朝たに起り夕べに倒るゝ新聞紙の難然として多數なる當代にありては中央及び地方に在りても先づ稀有の慶事として祝すべきなり、さながら新聞紙の壽命は永久無限にして天壤と共に窮極なし六千の齡を重ね

貳拾壹の年を閱する如きは造化の大行程に比すれば寸毫の歩趨にだも當らざれば未だ以て大方に誇らに足らざるにその効能を誇張して俗耳を驚かさんよりは寧ろ確を持して徐るに他日の成效を期せんと若の志本社の微意即ちまたこれに外ならざるなり然れども初號より積んで六千號に至る必ずや其の間の歴史なかるべからず貳拾壹の期間は短日月にして未だ算ふるに足らざると雖も山は高きが故に尊からず仙あるを以て尊しとなし新聞紙は壽きが故に尊からず靈あるを以て尊しとせば六千號の今日も紀念する爲めに既往の沿革を略叙するもまた不可なりとせ抑も高田新聞の既往貳拾壹年間に於ける沿革は如何

誕生

新聞の社會の木鐸たるおと世人に認められ吾が上越にも新聞刊行の議初め唱へられたるは明治拾五年の冬なりしが當時下越には新潟に新潟新聞と新潟日々新聞とあり中越には長岡に越佐新聞あり互に筆陣を張つてその主張を鼓吹するありしも上越には未だそのおとなく人々暗夜無明の思ひありや

るおと、ておの議忽ちに熟し其の年の十一月五日を以て常町善導寺に創立總會を開くに至り其の際創立委員として中川源造、竹村良貞、上田岩之助、倉石知藏、古橋包正、高橋慶次郎、齋藤謙次郎の七氏を推薦せりおの會合おと吾が高田新聞を生み出せし泉源にしてそれより協議計畫は立ろに成りし遂に翌拾六年參月六日を以て愈々刊行の認許を得、四月壹日を以て芽出た初號を發行するに至れり當時中川源造氏(現衆議院議員)は幹事の名義を以て總べての社務を管理、市嶋謙吉氏(前衆議院議員)は社長兼編輯人の名義にて主筆たり(主筆が社長兼編輯人の署名をなすは當時各新聞の例たり)而して編輯局には竹村良貞(現帝國通信社長)古橋包正(現時在官中なりと聞く)齋藤謙次郎(故人)設樂正吉(故人)眞保源吉(故人)山岸保平(故人)の諸氏あり會計掛として中川玖造氏を擔任し後ち丹羽氏繁氏(故人)おれに代り配達掛には岡六郎氏(故人)ありまた倉石知藏、正田新次郎諸氏

も時々來りて編輯事務を助け向はまた既故人となられし大井茂作氏の如きも創立のおとに干與し力を効されしこと妙なからず新聞創刊の際には高田吳服町の現今町役場となり居るおと原榮吉と稱する旅人宿ありたるを賃借し編輯、會計の事務をおとに取扱ひたるが未だ草創の際として活字及び印刷機械等を購求するに至らるおと吳服町なる今の丸山洋物舖のところにありたる益友舎と云へる活版所を托して印刷一切を爲さしめたり右益友舎は荻野又作氏の主宰なりしが其の後拾七年四月に至りおと合同の調整ひ新聞社の吳服町より轉じて中小町に移ると同時に兩者合併し茲に始めて新聞の外印刷事業をも兼ねるに至れり

創業當初の新聞紙

第壹號の新聞は本館唯一の紀念物として保存し置きたりしも其の後幾たびか居所を轉せし際遂に失ひしは遺憾なり、されど創刊當時の屆書には堅壹尺參寸五分、横壹尺八寸五分とありまを以て當時の紙面の如何なりしのを推想し得べし又當時鐵道の如き交

高田新聞

通の便なく新聞の原紙たる西洋紙の如き市中の紙店に多く蔵せきりしを以て一朝夕紙の缺乏を訴ふれば即時これを求むる途く其の間の苦心殆んど今日の想像に及ばざるものあり創刊當時主筆たり市鳩吉氏會て本紙第五千號の紀念當日その懷傷談にこの事情を説きて曰く「第一號を發行して一ヶ月ばかり経つと紙の品切れ申す一椿事が起つた今日の如く鐵道の便がなすので紙が切れたからとて直ぐ東京から取寄せるなど云ふ譯に行かない洋紙の到着を待たずして新聞を休刊せよと然らざれば日本紙の間合は是か二途何れかを擇ぶ外はないソコで已むなく日本紙で間に合はせよとにしたが新聞の大きさは今の比れば丁度半分位であるけれども壹枚で間に合ふ日本紙がないので二枚つぎ合はして拾數の發行したこの二枚つぎ合はせよとはなかくの手續で今日の如き高田新聞の隆盛時代には迎へ出来ることでないが當時はドウヤラカウヤラ間に合つた扱て日本紙で新聞

出さぬ如きは新聞社として大失体で讀者に對し今時出来ることではないが當時讀者の評判を聞くに却つて日本紙の方が有りがたつて探訪者に探らされて見ると御世辭かと思ふれば反古として値打があるからである云々」また以て當時の高田新聞並みに社會狀態の一斑を推知すべきなり

新聞の主張

明治拾六年四月初めて吾が高田新聞の起りたるは國會開設の詔勅發表後參事目になり而して世に高田疑獄として知られたる故亦井景昭及び風間安太郎、井上平三郎等が天誅を稱する徒黨を組み政府を顛覆し顯官を暗殺する目的を以て愈々高田より東京に立せんとして事露はれ逮捕せられたる翌年より當時藩閥の勢熾頗る猖獗を極め政府は治安妨害秩序破壊の名の下に在野黨を箝制するものと急なりしを以てその際憲政の大義を唱へて正論議を爲すもの往々にして執政者の忌憚るものとありたり

奇禍を估ふを免かれ高田新聞もまたその災厄に罹れること頻々として相接し爲めに殆んど一社の幹軸をその根本より覆されんとしたるあと一再ならずもその健剛なる精神と勇邁なる氣力とに至りては毫も撓屈せしむる所無き一難を經る毎に一倍の勇氣を鼓舞し奮りて正道を秉公道に従ひ極力を專制政府の暴壓に抵抗し憲政實施後と雖も藩閥は依然政權を掌握して非立憲の行動を恣にするが故に一面に之を矯正せんと共一面には憲政の美を譽んことを努めて怠らざり故に廿八年「遼東半島遠附の」とあるや軍隊百戰の偉効を一朝水泡に歸したる所以を痛論して大に外交當局者の責任を質せあり二拾一年に自由黨が山縣内閣を結託し天下萬民の公判を犠牲となし黨人一個の私福を計らんが爲め地租及び醤油税を増徴し尙ほ郵便電信料、鐵道賃銀を増加せんとするやこれに反對して民力休養の必要を叫ぶあり其の他支那保全を唱へ地租復舊を論じ行政、財政の整理を説くが如きは皆一再ならず而してこれ皆公平を性とし誠實を体とな

し正理公益の發揚を望むの熱心より出でたる者にして眼中また半點の私利私慾なし其の公平誠實の精神こそ高田新聞初號以來の歴史を貫きて其の所屬團體たる上越立憲改進黨(明治十六年結黨)の政友同盟會となり(廿二年三月)進歩黨頭城支部となり(廿九年)憲政黨頭城支部となり(三十一年五月)遂に憲政本黨頭城支部(三十四年より)たる今日に至るまで不變不動半として振とせらるゝとあるなるべし

社務管理者

可計其の他の庶務を幹理する爲め創立以來今日に至るまで其の人を代へたること妙なりからる明治拾六年四月の創業當初は中川源造氏幹事又は社主の名義にて専らあれりしが翌拾七年拾月職を去り同拾壹月よりは別に幹事又は社主を置かす可計白石吉治郎氏代つて諸般の事務を執らるゝなりこれより後或拾六年までは殆んど九箇年間専ら可計の手にて經營し大嶋琢郎(拾八

年八月)丹羽氏繁(廿壹年貳月)近藤給左工
門(廿四年拾壹月)の諸氏白石氏に次ぎて就
任せり内大嶋・丹羽、近藤の三氏が共、既
に故人となられしは遺憾なり近藤氏辭職
に及びて現任社長高橋文質氏入りてこれに
代りしは貳拾六年七月なりしが氏の就任以
來社務の紛雜を掌理せる傍ら世勢の進運に
伴ひ紙面の刷新、買捌の擴張等新たに經營
規畫せしもの甚だ多しまた社運の隆盛に隨
て社務の權機に參畫せしむる爲めその所
屬團體たる憲政本黨頭城支部より委員七名
を擧ぐるものと明治三拾四年八月より
みれを實行す即ち高橋文質、太田孫次右
上門、中川源造、室十一郎、丸山新十郎、金子
伊太郎、沖盛昔の諸氏現にその委員にして
互選により高橋氏をして社長を繼續せしむ
主筆記者

即ち氏と當時の社主平川氏との間に訂
結せられたる契約書に據れば明治拾六年參
月一日より同六月三拾日に至るまで僅かに
四箇月を以てその任期とせり然るに高田
事件の關係より氏の筆鋒端なく奇禍を買ひ
し竹村良貞氏と共に鐵窓の下に空しく悲風
慘雨を送るも前後八箇月に及び爲めに氏
をして歸郷の期を遅からしめたり、氏も次
ぎて侯野時中氏同拾七年拾壹月に來り居る
こと半載に満たざりて去り同拾八年貳月令
孫來藤氏代つて主筆となりしもおれまた侯
野氏と同じく任職頗る短かく同年六月
は早や既にその更迭を見るに至れり金澤氏
に代つて主筆たりしは久代孝次郎氏、久代
氏の後は正田新治郎氏にして即ち明治
貳拾年拾月より事なき正田氏去りて後
には山本鏗二氏來りて主筆たり山本氏は創
立以來の主筆中在職最も長く同貳拾參年
四月始めて上越の文壇に筆を執りし以來同
參拾壹年病を以て職を辭するに至るまで前
後九年の長き終始一日の如く勤勉熱誠を以
て編輯に當れり氏本社を去りて上京後一時

東洋報

は病勢懈り商況社に入りて再び筆を執
あとなりしに參拾貳年春宿病再發し遂に
不起の客となりしは惜しむべし山本氏の
仕には武田十一郎氏同參拾壹年七月以來
主筆となり留まるも壹年參拾貳年七月
去りて後關美太郎氏來り參拾參年拾壹月
氏辭職するに及んで羽仁吉一氏其の後任と
て來り大に紙面の改良に勉むるところあり
しが病氣の故を以て充分に其の抱負を伸ぶ
る途なく在任僅かに數月にして翌參拾五年
貳月辭任し同年九月現任胡桃正見氏來りて
主筆となる即ち本社創立以來貳拾壹年
して其の間主筆記者を更ふることも現任者
も實に拾名に及び平均主筆一人の在任期貳
年を當る割合を見るなり

奇禍

創刊の當初は政府がサーベルと法制とを以
て言論の自由を壓迫すること甚だしかり
より憤氣勃々抑へんと欲して抑へがたく筆
鋒銳利知らず識らず法令に抵觸して厄運
遭遇したるものと甚だ多かりき其の人々は市
嶋謙吉、竹村良貞、設樂正吉、新田忠藏、齊藤
謙次郎、小林良則、花井凍次郎、眞保源吉、山
岸保平、角田龜志雄、菱川文哉、湯川源一郎

友部周次郎、平野清治郎の諸氏にして殊
新田、眞保、角田の三氏の如きは再三奇禍を
買ひて固圍の苦楚を嘗めたり而して主筆
にして其の厄を蒙むりたるは市嶋謙吉氏一人
にして同氏に連座して幽囚の苦を同じう
るは竹村良貞氏なるが事は頸城自由黨の聲
援に關しおの等幽囚の志士も同情の熱涙を
洒ぎその真相を明かにせんも勉めたるに起
因して官吏侮辱罪に問はれ高田裁判所に於
いて重禁錮六月、罰金參拾圓の宣告あり
るを不當となし大審院に上告したるも同院
に於いて棄却となり遂に憾みを呑んで服
せらるに至れるなり當時の新聞の政治社會
感をもるに如何に危険にして如何に困難な
しかに就きて市嶋謙吉氏曾て其の當時の感
概を漏りて曰く「あの時は恰かも新聞紙を
檢閲に拘束する改正條例の出た時である一
方には斯かる危険なる法律あり一方には高
田事件に同情を寄せ警察官や裁判官や其の
他の官吏を相手に論鋒を向け次第であ
るから災厄の類りし鑒つたのも無理はない嘗
て今日より考へれば悚然たるを得ずであ
る今日に裁判も公平である若し公平を失

れば救済の途もある諸君と云ふものもあるが新聞條例も寛大である官吏を愚弄した位で法律に問はれる氣遣ひはない當時は中々そんな譯に行かない現に高田新聞の被告事件の一件は何にから起つたか云ふに一笑を催はす程の事が種々ある當時の高田警察署長某の高田事件に關係ある自由黨員を取調べた際答の内「其の方共は千才(戈)を弄せざる者である」と云つた然るに被告は「カンサイを弄せると云ふのが合點の行かぬ返答」云々と云ふが漸く「才の字」戈の字と形相似たるより或は音の違ひあらざやと問返したるに其の事と云ひし一節を新聞に掲げしを豫審中のことを公刊せりて新聞條例を問はれたのである今時あんなことを書いてとてドンな亂暴な警察でも告發せざるものなれば此の一例を以ても大略當時の有様を推量し得られる云々實に當年の新聞記者の苦心を想はしむるものありと謂ふべし續きて明治貳拾八年遼東半島還附のことあり志士憤然として起ち藤田其の非を論議せりや時の首相伊藤博文氏は錯愕狼狽爲せりと

あるを知らず漫りに威壓を加へて其の論議を符束新聞の停止演説會の解散頻々相接するに至るされど一國威信の繋るるあるとして止むべきにあらざれば縣下の五新聞即ち新瀉、東北、越佐、自由及び吾が高田の五者竊かに相盟約し同年七月貳拾六日を以て博文氏の責を問ふの記事及び論説を掲げ全紙面殆んど問責の文字を以て満たすに至り乃ち五新聞は直ちに發行停止の嚴命を蒙り縣情暗黒の裡に閉ざさるゝと殆んど同日に及べり而かも此の停止は固より五者の覺悟せる所なりき只憫むべきは長岡にて當時發行せる自由派の機關平等新聞が此の訂約に加はりながら機に臨んで節を變じ責任論を草する勇なかりし一事なりきこれを外にし最近に至りて奇禍を買ひたるは明治三十一年の晩に自由黨と山縣内閣と結託地租、醬油兩税の増徴と共に郵便、電信、鐵道賃銀を増徴したる時にありあの時に當りても反對の國論鼎沸の如く紛騰し固其の暴戾を責めて止まらざる國論の沸騰せる殆んど遼東還附の時に劣らざりき吾高田新聞もまた言の同問題に及び鋒銳脱し

東橋辰樓

て雷路の忌諱に觸れ内閣諸大臣を侮辱したりとの故を以て時の發行兼編輯人署名者箕輪美代太郎氏は鐵窓の苦痛を忍ぶふと月餘に及べり

本社の位置

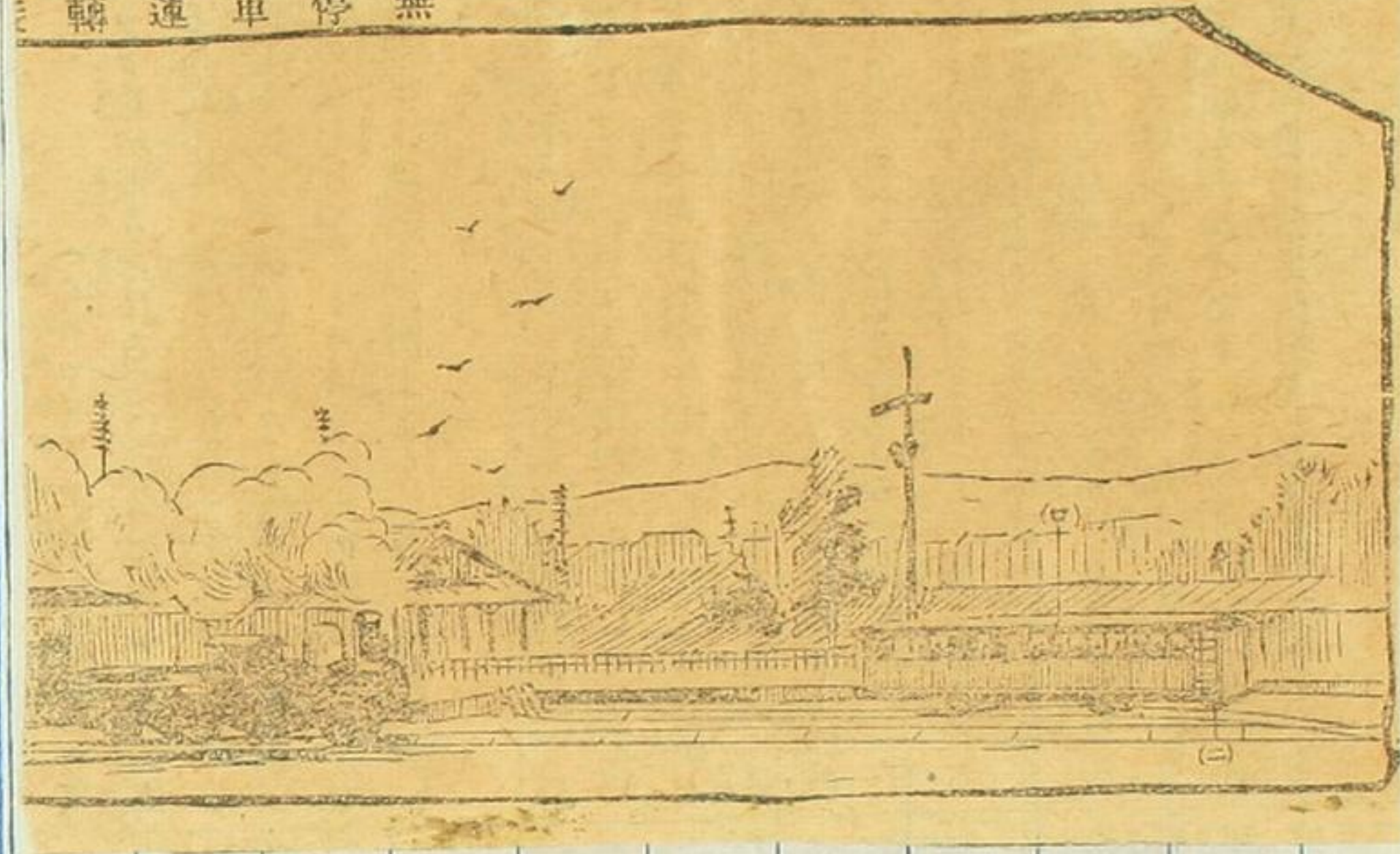
明治拾六年四月創立の際其位置は高田與服町にありしが其後同拾七年四月に至りて中小町に移り同拾八年八月寺町善導寺前に移り更に轉じて現在の場所上職人町に移りし者として時は同參拾四年十月月なりき

現在の状態

春過ぎ秋逝きて隨行く駒の足早く創刊以來既に廿有一の星霜を積みて本月本日は正に六千の壽齡を迎ふるに至る本縣下にて日刊新聞として現に刊行しあるは新瀉、東北、新瀉(日報)、越佐、長岡、相輪、越後、佐渡、佐渡毎日、吾の高田を加へて拾新聞の多きに及べとがその中最も盛んなるは新瀉にして今や七千八百號の上に出ずおれに次ぎては越佐にておれまた六千百號餘に達し共に縣下新聞中の長老として許され居れり而して以上尚新聞に次ぎての高齡者即ち吾が高田新聞なりと云ふ而して現時の社長は即ち高

高橋文實氏、主筆として編輯事務を綜轄しつゝあるは胡桃正見氏にして入村賢吉氏編輯長たり、この外大竹忠太郎、中村武一、小田清太郎、永田直次郎、香西秀雄、秋山迪夫の諸氏それ／＼分擔して編輯局に在り會計は箕輪美代太郎氏を幹し、植子、父連その他に至るまで編輯その任に當り依然上職人町に在りて新聞刊行の外に印刷業をも兼ね聖代のありがたさは文運の進歩と共に社運日に月々隆盛に向ひつゝあり

無停車運轉

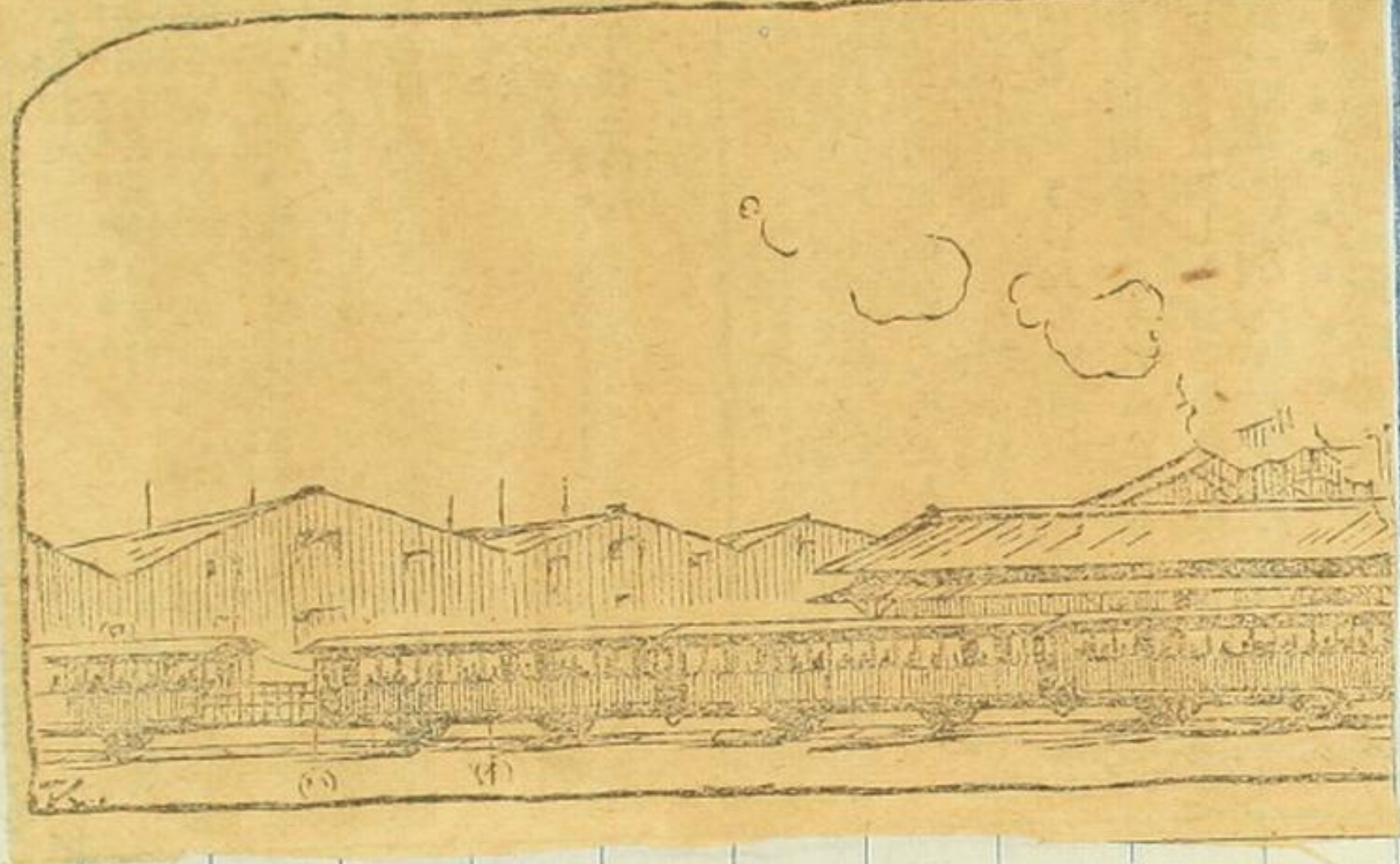


無停車運轉装置の發明

静岡市東照町四丁目時計商鈴木嘉七氏は數年苦心の末、鐵道列車無停車運轉装置を發明し本年二月特許を得、次で英米兩國政府よりも特許の認可を得たりといふ、此發明は鐵道列車をして途中停止することなく運轉せしむるを目的とし隨つて現在の鐵道に免るべからざる停車時間の空費を省き且運轉時間の短縮に伴ひ石炭の消費高を減するの利益あり又無停車進行中各驛に於て隨意に旅客貨物の積卸を爲すを得るを以て現今の急行列車の如く空しく小停車場を通過することなく全線を通じて一層の敏速と便利とを増進するを得べし、其の装置は列車が未だ停車場に達せざる以前に於て構内副線路に裝置しある準備車輛に旅客貨物を搭載し進行列車は構内を通過する間に之れを牽引して其の後面に連結せしめ進行中に旅客及貨物を本列車に移乗せしむ、又次驛に下車すべき旅客及貨物は列車進行中此の準備車輛に移乗せしめ構内通過中に之を放置し更に其驛に靜置しある準備車輛を連結して新に旅客貨物の供給を受くることとするに

東橋原製

變置列車の圖



あり、他の各驛に於ても準備車輛を放置及び牽引すること上記の如く反覆之を行ふものとす
 乗降準備車輛(ロ)を牽引すべき進行列車の後尾の車輛(イ)は其の構造に於て普通車輛と異るとなく只車臺末尾の底囊に牽引機(ハ)を取付け以て乗降準備車輛を牽引するの裝置を爲せば是れり此の牽引機(ハ)は二個の長方體にして牽引の際(ハ)引機(ハ)と接觸すると同時に自由に廻轉し得るを以て副線路に靜置しある乗降準備車輛を本線路に牽引し本列車と同一直線狀に連結するを得、而して兩者の間には橋を架して雙互間旅客の通行を自由ならしむるものなり
 本裝置を實行するには準備車輛及び本列車とも現今急行列車に使用する如き貫通式客車を用ふべく其他は各停車場の一部を昇降棧道(副線路)に改築する外、橋梁隧道とも凡て舊來のまゝを以て足れりとす
 今日東海道線に於る停車數は上り八百五十七回、下り八百五十回、合計千七百七回にして一停車の爲めに失ふ所の時間を四分とすれば本裝置の爲めに利益する所合計二百三十三時四十八分に及ぶ之を

のこころを誰んをわらへそをわらへし
そと火とやるといふ才一程はわらへし
うらやまのふくまきる陸軍大士の支援を
一も度ありんといふ其の定規ありま
三井くし収入ありといふ
ときいふ井戸もいふ
ひころのふくまきる月をいふ
を救ひこすや半信ありといふ
念せる田舎もいふ
うらやまのふくまきる
るをいふ



道おとす
七
於
後
と
ま
事
一
度
五
六
七

一人の心も谷からとる十有餘は、
のちと文印者たるの御書とて、
あつたは、
海とて、
石以、
べき、

東洋書院

一昌平堂の書も、
監輔の、
せんといふ、
この位と、
とて、
せんといふ、
海と、
世の、
七、

一、
九、

物も体も器もいゝもや奉動や其体の爲ま
う既に名もいゝに言ふと打て罷りうう日
本の俳諧もきき連中も此をこのまの如く
ハ決して外人の言ふや親もあまよくあぐ
んを取らういゝサイヤンスと思ふの如く
お別れして伊のまにまゝいゝ親の
あつてなう一あをいゝと決して四時
の如くも取らういゝ例は蜻蛉いゝ
まゝに書らういゝの即類を精漢しうは
・**●**いゝまゝいゝおのまゝいゝ...**●**其のまゝいゝ
も既に親もあをいゝまゝいゝ親のまゝいゝ

俳諧家

そのまゝいゝこといゝ間もいゝ而して俳諧を
いゝらうと云ふは平民文をいゝらういゝ丈なる
即ち七人いゝまゝいゝといゝといゝいゝ
これ等下流をいゝ人七あるといゝあつて
いゝるに細微り親もあをいゝ俳諧のまゝいゝま
あつていゝ城りいゝ**●**及んばいゝまゝいゝまゝいゝ
いゝまゝいゝ困難いゝまゝいゝいゝいゝいゝ俳
諧をいゝ文章の美のいゝまゝいゝマインテンセー
ションをいゝまゝいゝあゝ事物の親もあ...**●**ラフガ
ルウエーションといゝまゝいゝあゝ(セー)いゝ
いゝまゝいゝ決していゝあゝいゝいゝいゝいゝ

○西替の特油 西替物を誤るとも人々を
つたつた文の油をいふさういふかたも北の流
波瓊をいふさういふかたも北の流をいふ
かたもいふさういふかたも

第一 七にはを思はせしむるが

(例) この序拍をなまらぬ氷の味もたぐひ

(俗徒然)

唱へたるは松風自は法のさう(俗徒然)

朱松龍田のひまを教へし、白若龍

田のひまを教へし(日若龍)

詠を朱松は龍田のひまを教へし(日若龍)

東洋製

この序拍をなまらぬ氷の味もたぐひ

第二 詞と地文との間を「と」を思はせしむる

(例) 人間の余は命を救ひますぬむ(あそく)

一 申せば(二代男)

七あまの命をいふ所しぬ、大夫思ふはぬ

一 申せば(二代男)

あまの命をいふ所しぬ、大夫思ふはぬ

あまの命をいふ所しぬ、大夫思ふはぬ

りぬ(武道傳事記)

あまの命をいふ所しぬ、大夫思ふはぬ

くはまを能と略しぬ、大夫思ふはぬ

第三〇 孝子大格かゝる子と云ふを

第三 詞と地文とを打違ひしるを

例 是れをいふ事とわづ母昔より一板と、めん
一と(五人世)

わが母昔しと昔も後とを一板と、めんし
しと昔も昔もとを詞の一端と地文の一端と
を違棚のめく事とて、其の界を判かせるの
ことと云ふ事あり

第四 前句と後句とを打違ひしるを

例 比の卯の花山を眺む(ぎ)武彦(其の)
はやもアしるを祝儀状と云ふ入こ

東洋書院

通文のむきあへんかゝる格と
ふか人も教むぢりの文と

はやもアしるを祝儀状と云ふ入こ、其んをふ
ふ入ことやうなるべきを、二句の中間
にある「祝儀状」を領しとて、連続した
る類なる、いは「いつら我々のも強なる
熱田のハ剣」などのかけ詞の筆法を
異なるる方面に適用し、そのつらさを
似し事との例の「強めさき」は、えおんよ
アしるを後句と続かぬ、と云ふ、強
かさぬ「又も、強めさき」とをわし、強

少くも「〜」を「〜」と改め、猶ほ「〜」の例

第五

前例定姓せしむるは、
例(母は夫死とすとも、夫死の例は

天を以て終(新可免也)

其死人の名をとつた二刻并呼ひ続けし、
不忠儀や左衣の手を再ふも是れ各

せらむもの隠すもまむ人中心終らせ、
母の身こそさかた懸しきこもはるし

(二代男)

短編

母は夫死とすともいひやむ、夫死の例

はといひやむと、夫死とすともいひやむ

の例も後々免びうつるも、め味ある

この免びうつるもの世に傳ふも、高松

人は死を以て輕佻な爲の文符と爲

るも、西條の主義は、いはずも解

定するは出来なげ取除くとい

ふも、あつた、これ等の事等を述

べし、あつたの文を、あつたといふ

第六

常々其例を傳へし、終を以て其終

の代用とちていふ

(例) 晴をほく高野を車一軸と(三代男)

ほくくくくく靴釘とあつたええ

美くくくく(武名傳書紀)

たつたあまくがぶか(三代男)

大あつたええといふ名を、大あつたええお出

て来た車一軸とて行つて現せる類うえ

一程ゆきく(色)おりたる有終流る

第七。短くくくくくくくくくく

(例) 人間をびく手造のついでくくくく

(三代男)

麻屋

元七石使いまんはを、たつたあま

くくくくくくくくくくくくくく

たつたあま(三代男)

分三十段まじりくくくく(元男)

或飛くくくくくくくくくくく

くく(ワキ)水代(元男)

人の名を、高野の也きあつたええ(二代男)

或の雪の可きあつたええ(二代男)

西山を身の内、切はあつたええ(元男)

柳のえを、手おつたええ徳和(元男)

すえ(元男)

軒の玉水神を除けて雪の海をいかにせん
古(二代男)

能くもほくばくを神を水に夏七拍め
(三代男)

男の軒を接ぐしきこよ十九年の訓集
此女不の夢めと泪目七拍め(本朝権臣
比古)

あつたおいとをめと八割をみるあひても
泣涙を逃げずををまきまじあもせよ
ついと一筋の胸を言め(曰上)

この教をけまはは死陰出するよといふ

十載の程をさるるをばけの二刻を後を
るく「さよとをん」「護り(とき)の程をさる
の全体を定めて「護り(とき)の程をさる
と「容」し「さよ」清「新」なるふとの
さるる「西仙とあいのついで」
後「さよ」十九年の訓集「さよ」の
はの関係をさるる涙を催さ「め」
さよ「さよ」の白とすのめを問り「
い」さるる人物のやう風流書「さよ」
は「さよ」も彩「さよ」

はいあきる粹がよみけし (二代男)
 粹きばし言はれはるる我の
 りき氣のよき (二代男)
 いかんを言とて山極き (二代男)
 秋きあきる人かあきと師方の
 来 (二代男)
 香気のおきききききききききき
 と人のいかにあき (二代男)
 おのきあきいのかきききききき
 叱んば現れ海に瀬のまじりのあき
 きききききききききききききき (二代男)

東洋書院
 蔵書印

第三

漢の漢文を漢文に引用せしむる

(例) 昔をゆくは相持おゆと思ふ心と
 ちかきききききききききききききき
 (ちかきき)

幸心の端をいし山鉾の吐へんくと
 及鳥年一秋の初おおききききき
 斬七お凍きすえを怪しきえの元
 ぶは人魂き (二代男)

魂もくし神よあきききききききき
 りあききききききききききききき
 まきききききききききききききき
 ちかき (二代男)

揚子江を指えてはしるしを西のふねに三川
 濠とて船堀を堀流し入る、一歩に尙
 十歩の太夫格子大溝の漲るを吞み
 せし控つる雨下る煙の空揚るを
 蒸烟の云、太政のま可くあつては
 去おる累をよこす(三代男)
 御文のよき来たるを引用するを
 例才十三例のこくくするに(註)
 一は(男)の降る

第九 文法を改めしる

まよひの文をよこすを(註)
 己 吾等文のよき来たるを引用するを
 例才十三例のこくくするに(註)
 一は(男)の降る

(例) 房の月の影を茶の香を飾り
 玉のんを(二代男)

花の家下の雨を(註)
 (註) 花の家下の雨を(註)

雨の家下の雨を(註)
 花の家下の雨を(註)

例) 是書を所方への御紙を申上りし
(武名傳事記)

新座の人道とて申上りし御紙を
申上りし(武名傳事記)

「打」に「等」用ひて加行言耳を記す
りつ坊を「只」給くしとて申上りし御紙を
申上りし

和十の
和十の
和十の
(略)

和十の

例) 十月十二日の日おとせし御紙を
申上りし(三代書)

此義は... 果し... 取
(武名傳事記)

あは... さ哀れ... 打
... (三代書)

真の... 夢...
... (谷つれ)

皮癖... 申上りし...
... (三代書)

玉あり... 申上りし...
... (三代書)

おと... (三代書)

然を亦て... (以下略す)

○... (以下略す)

奥の種木...

東洋...

七つと寝て...

世物へ...

麦歌...

カコシ... (以下略す)

て死するもなきが、汽車の車窓より眺むるに
るも死するもなきが、即ち二尊を祀りて神士の
也隨て供養もこゝに在りて体氣を培ふこと
容体がること、給へることをいふはよむこと天
真海陵より及ぶるに然るに因に終るまで
此の事を知るは見え、而して下等な事には
下等な事を知るは見え、而して下等な事には
この事を知るは見え、而して下等な事には
又同じく扱へるを論じたい

若し此の寺が教として此の寺の寺に在り
一々の徒をわきまをわきまのわきまに在り

可し、若し此の寺は此の寺に在りて三尊
汽車を乗るもなきが、何とせんぬき人
の中、國民生活の範圍を此の寺に在りて
也、風俗も人柄も、疾苦も、此の寺に在り
海峯の眺むるも、此の寺に在りて
取らん、此の寺に在りて
赤切符の眺むるも、此の寺に在りて
一程の快感をおせん、此の寺に在りて
我々の國を、此の寺に在りて
七、八、九、十、此の寺に在りて
全體の上を、此の寺に在りて

白屈菜と左の如き植物にして其特色は左の如し

●紅葉山人の新薬 社員尾崎紅葉氏の病状は依然として變調を見ず栗本博士の手にて診療中なるが既記の獨逸新薬は未だ本邦に來らざるを以て電報を以て紹介したれば來月は到着する由なり尤も博士の説に依れば右の新薬は「白屈菜」といへる植物の成分と同一なれば新薬の着するまでは此白屈菜を用ゐる事になり市中の藥種店に就て尋ね搜したれど一葉も見當らざりしより昨今門下生の誰彼帝國大學に就て標本を借受け近郊を跋渉して採取に力め居れど約十五貫目（此だけ蒸溜させて得る所の液は少許なり）を集めたき所へ未だ僅々五貫目位しか集らざるにぞ人々氣を焦らして江湖の特志家より其採取寄贈を望み居れり、白屈菜は本草綱目にも載せありて腫物を消す旨を記るしあれば今回獨逸にて發明せし胃瘡の新薬と成分の一致せるも偶然にあらざるべ



し、白屈菜は下圖の如き植物にして其特色は左の如し

東洋原製

▲草の高さ三尺位まで
▲葉は菊に似て一葉毎に五つに分る
▲花の形大きき圓の如し、四瓣にして黄色なり萼なし
▲根に小塊あり、色人參の如く、切れば棕色の汁出づ、莖を折れば黄色の汁出づ

▲素人目に見れば三種類あり、大根の葉の如く生ずる者と、野菊の如き者と、蔓やうのものど、
▲莢は鈍豆に似て大きき如圖
▲陰濕の地に生ず、乾燥の場所にも皆無なるにあらす、古邸の土堀内又土手の下などに多く生ず

○伊勢の徒ら流六の風妻つれあひあつことを
あそび思ひあつてそそげんも過つたことを
とそいゆるもあつてそそげんも過つたことを
大坂の朝野の流中一圓なる花を余等
近したる、草の如きものあり、余等
の葉つてそそげん流中一葉の如きものあり、余等
流中一人の妻と入るもそそげん一人と流中

ある。此男如きことを志し、その英園の心を以て
 おもむくを確念し、初期の夜と互に心性を破る
 を欲け、下りしに性の確念をもち、あつたる
 めと深と接し、その言をたし、自ら心性の
 批判をうし、その言をたし、自ら心性の
 あつたる、その言をたし、自ら心性の
 思おもふ、その言をたし、自ら心性の
 言をたし、その言をたし、自ら心性の
 て此の術の所大なる流行せしこと、女も本末
 骨を術の定記、行ふと正終を得、その野史的
 代り、その言をたし、自ら心性の

東洋製

設法即ちの年、是はの年、その言をたし、自ら心性の
 手も此を破、改之、改之

近來生理の研究を進るに従ひ心理攻究の途に於ても亦著しき革新を來せり是に於
 てか夙にゴール博士が主唱せる腦皮質局部作用説も漸く識者の注意を惹起し輓近泰
 西に於て大に復興を見るの機運に向へり蓋し博士の學説たるや凡て心性原機能は腦
 皮質に於て個々特殊の中樞部域を有し各機能の強弱は他點に異状なくんば之を司る
 所の中樞の大小に比準すべしと云ふにあり是れ素と觀察と實驗との結果より歸納せ
 るものに外ならずして解剖生理病理等の各方面に於ける夥多の實例を以て之を證明
 するを得べきは勿論既に催眠術の應用に依りて腦皮質局部作用を自在に發動し得る
 に至れる事實あるにも拘らず我國に於ては學者多くは斯學を以て尙幼稚にして信を
 置くに足らざるものご殆んど是が研究をたに企つるものこれなきが如し然るに斯
 學にして完全に發達せんかこれが應用により教育上醫術上其他社會百般のことに裨
 益する所實に多大なるべく尙之を補ふに實驗的神経系生理學の應用を以てせば更に
 一層の効果を現呈するに至るべし吾曹夙に茲に見る所あり在英以來攻究實驗するこ
 と多年益々其忽諸に附すべからざることを認め爰に一學館を設けて斯道の普及進歩
 を計らんと欲す幸に廣く江湖志士の贊助を得て本學館の趣旨を全ふするを得ば豈單
 り吾曹の幸福のみに止まらんや

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東洋圖書

以下
5 丁
白紙

谷山聯隊長の臨席ありて正午退散せりと云
○新發田聯隊の野外演習 同聯隊にては
本日北浦原郡次第演に於て野外演習を施行
する由なり

○農事試験場長會議々案 來る七日古
志郡役所に於て開く縣下各農事試験場長
會議へ中魚沼郡農事試験場より同會へ附議
せし議案は左の如し
一町村農會を振興活動せしむる方法如何
一町村農會をして一般に施行せしむる事業を査定する
事

○昨今秋蠶の賣買價格 本年は土用入後
より天候全く順當なりし爲め各地に於ける
秋蠶の生育は何れも佳良にて近來になき豊
滿なるを以て昨今の賣買價格は一貫目に付
三圓八九十錢より四圓三三錢内外の唱直
なりと云ふ

○北浦原郡内稻作實況 北浦原郡内早植
地方は移植後晴天打續き氣温亦高まりしを
以て肥料分解宜しく隨て稻の生育良好な
りしも晚植地方は移植後間もなく天候不真
に傾き霖雨連日爲めに藥力阻礙せられ莖葉
軟弱にして前年に比し幾分の劣狀を呈した
りと雖も土用明より天候恢復し生育又大に

方に於ては兎に角其歩を進めて文部省廢止
論さへ内定するに至りしにぞ外交主任者等
は心甚だ平かならず特に山本氏の如きは
兒玉氏の働き振を嫉視する所あり今や内閣

滿州に居る露助もは、昨今次の意味の軍歌を唱へて居るさうだ、支那でも負けるまではコレと同トやうなをいふて居たのだ。別に小櫃にさへる送らない、レホらしい意氣だたさ賞めて置くもいゝが、我國にも何とかなに酬ゆる程の元氣のよい歌が欲しいものだ。

▲日本討伐軍歌▼

天に二つの日有るなし

地に統一の君ありて

世界平和は見るべけれ

こは是れビートル大帝の

我等に下し置かれたる

最も尊き遺勅なり

遺勅のほを畏みし

我等の父祖が功勳は

烏拉爾、黒龍、踏み破り

夢に乗り取るマンチユリア(滿州)

松花江に飲ひて

馬首立て直し、遼東に

要害固堅の開ある

旅順の港は一トなだれ

通商多望の青泥窪

早やくも我手に歸しにけり

早くも我手に歸しにけり

かくて進まん勢ひに

老大不振のキタイスキー(清國)

中華と稱へし帝國は

我が額上の肉ならめ

折りしも有れや、音に聞く

ヤボンスキト(日本人)とて小兵者

我等の進路をさへぎりて

一矢を酬ふる殊勝さよ

半身不随の英國と

取り結びたる同盟の

他力を頼む太刀先さが

強硬なまゝは小櫃なり

いでや來れや、目に物見せん

敵は地の利に據りて

海洋掃波の勇あるも

我に天授の使命あり

守るに強き要塞あり

進むに勇むコサツクの

馬蹄にかけて蹂躪せん

猫額大のヤツボン(日本の)

領土屠らん樂しきよ

士民塵殺、面白や

りてハカ／＼しからざるに反し兩政整理の方
方に於ては兎に角其歩を進めて文部省廢止
論さへ内定するに至りしにぞ外交主任者等
は心甚だ平かならず特に山本氏の如きは
兒玉氏の働さ振を嫉視する所あり今や内閣

明
弘治三十二年九月
上院起筆

春城学人